

「……で、無理矢理肉体関係を持った後に正氣に戻つて、死んで詫びようと思つたけど死ぬ自信がなくて僕を呼んだと。つまりはそういうわけだね？」

にっこり。笑顔で告げる新羅はさわやかですらあつた。「僕がセルティと二人きりの時間を満喫しているときに、彼女が僕のための夕食を作ってくれる、そんな幸せなひとときに、呼び出しの電話をくれたわけだ」

つまり恨まれているらしい。しかし、静雄も真剣だった。なにしろ自分は帝人を陵辱した。許されるはずがない。彼はまだ高校生で、嫌だと言つていたし駄目とも、やめろとも言つた。それを強引に自分が抱いて、——そのことを自体を、未だに自分は後悔できていない有様だ。

それでも、帝人に対してひどいことをした、という自覚は一応ある。許されない、ということも。

それだけのことをして、後悔できない自分にも驚いた。彼を形だけ手に入れて、それを喜んでさえている。

自分はこんなにも最低で最悪な人間だったのだと初めて知つた。このまま、自分はきつとずっと後悔できないだろう。

つまりは誠心誠意彼に謝罪することが、自分にはできない。

嫌がる彼を無理矢理抱いて、それなのに、それでも、後悔できないのだから。

ならば死んで詫びるか、と思ひ至つたが、何しろ静雄は頑丈だ。ちよつとやそつとのことでは傷もつかない。ついてもすぐに直る。そこが便利でもあつたが、現状では厄介でしかない。

そんなわけで、新羅を呼び出すことにした。彼ならば特殊な毒ぐらいは持つているかもしれない。洗つていたが、とにかくすぐに来やがれ、と言うとものすごく嫌そうなため息をついた後、了承しやつて来て今に至る。

「帝人君は氣絶同然に寝てるわけか。……ふうん、体は拭いてあげたんだ」

「あんま見るな」

新羅の視線の先には帝人がいる。新羅の言葉通り、今、彼は眠つていた。自分と彼の体液で汚れた体は濡れたタオルでぬぐつてあるが、彼の着ていた衣服は現在ただの布切れなのでゴミ箱行きだ。つまり帝人は全裸で寝ている。掛け布団でそこまでは把握できないだろうが、あまり新羅が帝人を見つめているのは氣分を害する。

「そうは言うけど、君が暴行した以上、帝人君は怪我してるかもしれないし、一応診察した方が良いと思うけどな。だいたい、僕は言つたはずだよ。暴走するなつて」

その言葉に、そういえば、と思う。確かに、彼は先ほど言つていた。

——帝人君のためにも、暴走はしないようにしなよ。つまり新羅はこうなるかもしれないと、その可能性はあると、あの時点で思つていたことになる。